



りん
魚鱗

が
河

阿賀には、懐かしい風景と
新しいロマンがある

第 5 号

<http://www.aganogawa.jp/>
E-mail info@aganogawa.jp

発行 2011/7月上旬
阿賀漁協組合報

発行 阿賀野川漁業協同組合／事務所 阿賀町石間 3 8 8 1 - 4 ☎0254-99-1031 FAX1035

- * 22 年度決算 近年になく厳しい状況…
- * 遊漁券販売問題 一定の前進をみる
- * 安野川へサケ稚魚試験放流・・・四年後に期待！
- * サケ有効利用事業（サーモンフィッシング）実施へ



原発↓放射能そして今、水力発電が、
（改修進む東北電力豊実発電所の春）

阿賀と共に 83 年！

◆昭和3年に建設された「豊実発電所」は、戦後復興と高度成長期を支える原動力としてその使命を果たしてきたが、老朽化から発電タービンの取換えと、それに伴う管理棟の建設が、平成21年から24年までの工期で行われている。

※手前が排水口、一段上中央が発電棟になる。
(豊実ダム発電所/24. 5. 2撮影)



桜マスなぜ増えぬ？ まか不思議・・・

サクラマスは、河川の上流で産卵し、生まれた稚魚は一年で成長して翌春に銀毛幼魚となって海に下ります。そして、降海後はオホーツク海で夏を過ごし、冬季に津軽海峡周辺や日本海沿岸で越冬した後、春の川の増水時期に生まれた川に戻って産卵まで過ごします。

海での生活期間は約一年です。北海道では八月下旬から十月はじめ、本州では九月下旬から十月下旬に多く産卵します。サクラマスのうち、川にいる間の幼魚や一生川で過ごすものをヤマメと呼びます。



花もも (小松地区)

河川美化にひと役

四十年位前、ここはゴミ捨て場だつた。
ある若者が、花桃を育てる会（入会金一人千円）を結成、会員を募つた。賛同者が三十人となり、植栽を始めたのが十年前である。
育てる会では、子々孫々に資源を残すため、毎年植栽を行っている。勿論、植栽後はゴミの投棄は一件も発生していない。

閑話休題

「阿賀野川は川の死骸だ」六年ほど前になるが、旧三川村に住む先達の言葉である。

昭和に入り発電所の建設は時代を牽引し、電氣の力は人々の思考さえ変え、生活は大きく変貌した。



近年の河口域は、滞積砂の拡大が進み、新潟空港誘導灯右岸側では、船舶の出入りにも支障を来している。これは、上流部における大型ダム（県内四基）が水量調整を行うため、この滞積砂を押し出せないのである。

この弊害は言うまでもないが、遡上魚にとつて劣悪な環境である。

このダムに（頭首工含む）加えて床固め（堰）が二ヶ所あり、遡上への影響は無論だが、問題はこの溜水域にある。底には、泥炭が滞積し夏期にはガスが発生する。この条件下では、遡上後半年ほど本流で過ごすサクラマスの成育に大きな障害をあたえている。又、魚道の改良も早急の課題だ。豊実ダムの魚道では、驚くことに通年通水をしていないと言う。

阿賀野川頭首工では、改修工事と併せて、左岸魚道の改良が行われたが、農業用取水口が近接するため、抜本的改良にはほど遠い状況である。

◇こういったなか、この度の大震災による原発問題から水力発電が見直されている。水力は無尽蔵でありエネルギーとしては最適であるからだ。しかし、川は、地球の大動脈である。

森から新鮮な栄養を海へ、そして不純物の浄化など全ての動植物が生きる必要不可欠な要素なのだ。この血管が動脈硬化を起こしたらどうなるだろう。

日本のエネルギー政策の方向も定まらない現状であるが災害に弱いデジタル化、災害に強いアナログ化は今回の震災で明白になった。ダムが必要なら、それもやむをえないだろう。だが、そこに住む動植物と、人間が同じ地球の仲間であることを肝に銘じなくてはならない。人間主体の河川行政から、自然と共生できる河川行政への変革を強く望みたい。掛け替えない貴重な資源を後世に贈ることが現代に生きる我々の使命ではないだろうか。

阿賀は「死骸」ではなく、掛け替えのない財産としたい。

阿賀野川は「懐かしい風景と新しいロマン」が満ちてゐる。

寄稿（代表理事／村山）

東日本大震災により被災されました方々に、心よりお見舞い申し上げます。
一日も早い復興をお祈り申し上げます。